播磨国からやって来た瓦

平城京跡（左京五条四坊九・十坪・条間北小路）　奈良市大森町

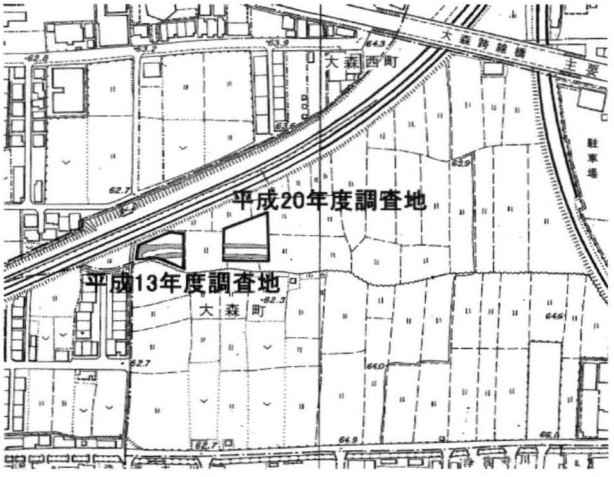
ＪＲ奈良駅から南へ500ｍ程の場所に広がる水田地帯では、奈良市によるＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業が進められています。この事業地が平城京跡に該当することから、平成13年度から発掘調査を実施しています。今回は平成20年度に行った、平城京左京五条四坊九坪の南辺部と十坪の北辺部、そしてその間に位置する東西方向の道路である、五条条間北小路の発掘調査について紹介します。なお、今回の発掘調査地の西側では平成13年度に発掘調査が行われています。

検出した遺構　検出した奈良時代の遺構には五条条間北小路とその南北両側の道路側溝、北側溝にかかる橋、九坪の南面と十坪の北面を区切る溝、九坪宅地内の掘立柱建物・塀、溝があります。

五条条間北小路は幅が約5.5ｍある東西方向の道路です。道路部分が谷地形にあたっているため、路面が南側溝に向かって上がっています。そのため、路面は平らではなく斜面になっています。九坪の中軸線より東よりの位置に北側溝を渡るための木橋がかけられていました。また、溝が最終的に埋まった段階では、水のあふれが路面全体をおおっており、南北両側の道路側溝が機能していた時期も、側溝の水が路面にあふれていたことがうかがえます。

北側溝は幅約２ｍ、深さ約0.6ｍの溝がまず掘られ、その溝が埋まった後、新たに幅約１ｍ、深さ約0.2ｍの溝を掘りなおしています。最初に掘った古い溝の北岸には護岸の杭が打ち込まれていました。古い溝の中からは、墨書土器、土馬、唐三彩、銭貨（和同開珎・萬年通宝）、銅製巡方（じゅんぽう）（腰帯具）、佐波理製瓔珞（さはりせいようらく）（銅・錫・鉛の合金の垂れ飾り）、ウマの骨が、新しい溝の中からは播磨（兵庫県西南部）産と考えられる平瓦が出土しました。

南側溝は幅約３ｍ、深さ約0.6ｍの溝です。北側道路側溝に比べると溝底の凹凸が著しく、丁寧に掘られているとは言えません。溝のなかから播磨産軒丸瓦が出土しました。



調査位置図（1/5,000）

五条条間北小路（西から）

九坪と五条条間北小路北側溝（南西から）

播磨産の軒瓦　今回の調査では播磨産軒丸瓦と播磨産と考えられる平瓦が出土しましたが、平成13年度に実施した今回の調査区の西隣の調査区でも、五条条間北小路北側溝と九坪内から播磨産軒平瓦、播磨産と考えられる平瓦・熨斗瓦が出土しており、播磨産瓦は五条条間北小路北側溝の北側に想定できる築地塀、またはそれ以北の九坪内の建物に葺かれていたものと考えられていました。なお、平成13年度調査の出土土器を再検討すると、播磨産須恵器も出土していたことがわかりました。出土した播磨産の軒丸瓦と軒平瓦をここで紹介します。播磨産の軒丸瓦・軒平瓦は、ともに兵庫県加古川市の古大内遺跡出土軒瓦を標式名とする「古大内式軒瓦」で平城京内では他にみつかっていません。「古大内式軒丸瓦」は単弁13弁蓮華紋を飾っており、中房の蓮子配列が中心に１つ置き、その周囲に６つを配置する１＋６のⅠ型と、１＋５のⅡ型が知られていますが、今回の出土例はⅠ型です。「古大内式軒平瓦」は、内区に５回反転均整唐草紋を飾っています。唐草各単位に山形の蕾を配する点が特徴的です。布施駅家に比定されている兵庫県龍野市の小犬丸遺跡出土品との実物照合を行った結果、同笵品で製作技法も同じであることから、播磨で生産された瓦が平城京内に持ち込まれていることがわかりました。

播磨産瓦が出土した背景　「古大内式軒瓦」は「播磨国府系瓦」と呼ばれる瓦の一種です。「播磨国府系瓦」の出土分布は、ほとんどが播磨国内に限定されており、その出土遺跡も本町遺跡（播磨国府）・播磨国分寺・山陽道沿いの駅家であることから、播磨国司の管理下において生産と配布がなされたものと定義付けされています。このような瓦が、どのような背景により、平城京内のこの地にもたらされたものでしょうか。

ひとつの可能性として、九坪内に播磨国の調邸があったのではないかという仮説が考えられます。調邸とは諸国から運ばれてきた調物を一時保管する施設であり、国から調物を運んできた運脚夫達の宿泊機能もあわせもっていたと考えられています。現代の感覚でいえば、「播磨国の平城京出張所」とでもいえましょうか。史料では、平城京東市の西辺りに相模国の調邸があったことが知られるのみですが、当然諸国が平城京内外にもっていたと想定できます。このような性格をもつ調邸には、調物を保管する倉庫群や運脚夫達の宿泊したであろう長屋建物の存在が想定できます。しかしながら、これまでの九坪での調査地は、大半が南端部であることもあり、遺構の上から存在を証明できているわけではありません。今後の発掘調査による九坪内の様相解明が期待されます。

播磨産の瓦

発行　奈良市教育委員会　平成２１年３月